

中国で一番美しい村・^{タンバ}丹巴訪問の旅 (写真による旅日記) ②

2016年2月5日～13日(参加8名)

■2月9日(木) 丹巴・巴旺 松安寺で巨大タンカ(仏画)のご開帳を見る

丹巴(県)は、四川省の行政区では甘孜藏族自治州(Gānzī Zàngzú Zìzhìzhōu)に属し、章谷と巴底の2つの鎮、それに13の郷があり、今回訪問したのは巴旺郷と呼ばれる辺りで、宿泊した民宿がある甲居村周辺の景色が「中国で一番美しい村」の評価を得ている。

以前、夏に訪れた時も深い谷に面した山の斜面、緑に埋もれるように白い建物が点在し実在の村ではないような美しさだった。今回は春の兆しが川べりの柳の梢をやっと色づかせ始めたばかりの季節だ。山の斜面に緑はないが、却って建物がくっきりと立体的に飛び出して見える。

民宿に入った夜、たまたま新婚らしい中国人のカップルが宿泊していた。私たちが屋根付き中庭で、焚き火を囲んで拙い中国語で「北国の春」を歌っていたら、中庭を通りかかったそのカップルの男性が「あれ!?!」という感じで、一緒に「北国の春」を歌い出した。その声が見事で、更に別バージョンの歌詞で「北国の春」を歌ってくれた。素晴らしい歌唱力で、全員聴き惚れた後はやんやの喝采だった。翌朝、民宿の屋上に上ると、彼が気持ちよく声を張り上げて歌を歌いながら写真撮影をしていた。

頭の上は日中の晴天を約束するピンクがかかった優しい青空が広々と広がり、深い谷から立ち上がる山の斜面に白い建物が朝日を浴びて点在している。この世のどこかに争いがある事など無縁のような平和そのものの人々の営みを感じさせ、歌う彼の気持ちがとても良く分かった。わたしも大きな声で歌いだしたくなるような「そこにいる幸せ」を心の底から味わった。

さて、今日は、巴旺郷の松安寺¹⁾が保管している大きなタンカ



御開帳準備中の松安寺の境内



生き仏様からハダ(祝福の布)を掛けて貰う



寺の屋根からタンカが下ろされる



カバーがはずされ眩いタンカが現れる



それぞれハダを持ってタンカの前に進み祈りを捧げる

(仏画)²⁾が開帳されるとのこと寺に向かう。寺はやっと法会の準備が始まったところで、私たちは金色に輝く寺の中を一巡りし、寺の門の脇の接待室に招じられた。お茶とお菓子の接待を受けると共に、ひとりひとり松安寺の生き仏さまより「ハダ」と呼ばれる歓迎と祝福の布を首に掛けて貰った。

やがて黄色い布に包まれた電信柱状のものが、寺の中から引きだされて寺の屋根からつり降ろされた。カバーの黄色い布がはずされると、チベット仏教ゲルク派開祖のツォンカバを真ん中に大きく描いた眩しいばかりのタンカが現れた。寺に集まった人々はそれぞれハダを手にしてタンカの前にしつらえられた祭壇の前に進み出ると、ハダを祭壇に備えて丁寧に祈った。私たちも彼等に交じって心を込めて祈った。今年はいいことがあると期待したい。

■ 2月10日(金) 晴 松安寺「チャムの踊り」を見る

昨夜、宿の夕食に出された野菜料理のあまりの美味しさに自分の年齢を忘れたのがいけなかった。夜中に目が覚めたら突然の嘔吐と共に下痢も始まった。食べたものは全部吐き出した筈なのに嘔吐は止まず、結局朝ごはんは、皆の健啖家振りを横目にお湯だけで済ませた。宿は掃除が行き届き、ベッドは大きくてゆったりしていて寝心地良い。トイレも清潔で水洗式だが和式風トイレなので高齢者にはキツイ。

今日は松安寺のお坊さんや選ばれた村人が奉納する仮面舞踏を見に行く。外国人は見学できない可能性があるとの連絡を頂いていたが、大川さんが複数の政府機関やお寺と折衝、参観依頼の文章なども工夫されたそう私たちは観ることができるようになった。

ユニークな、そしてどこことなくユーモラスな仮面を付け、衣装を纏った動物や異界のもの達が入れ替わり現れて松安寺の境内を跳んだりはねたりして踊り回った。物語があるようなないような感じで、大川さんの話では、基本的に平安(魔除け)と豊作を祈るものだそうだ。日本各地の神社で新年に奉納されるお神楽に近いものなのかもしれない。



▲「チャムの踊り」についての詳細は、キーワード「チャムの踊り」でネット検索してください。

■ 2月11日(土) 晴 松安寺で元宵節を楽しむ

昨夕、甲居の民宿から丹巴市内のホテルに移動した。朝、目が覚めて窓の外を見るとホテルの脇を流れている川向こうの山の斜面が真っ白だった。昨日は終日好天で青空が広がっていたが夜の間には降雪があったようだ。

11日は今年の春節・最後の日で、中国各地で元宵節の廟会が開催されている筈である。丹巴の元宵節は村々の人たちが寺にお参りし、踊って歌って楽しむ。松安寺の春節の行事が3日に亘って催されたが、11日の元宵節は人々が一番楽しみにしている行事だったのだろう。

丹巴の雪景色を暫し撮影し、松安寺に行く頃には、引きも切らず寺の参道を登って来る人たちが、山門脇にしつらえられた香炉に太い線香を供える(写真1)のでそのあたりは煙がもうもうと立ち込めていた。山門から寺の境内に入った場所に、寺の本尊である阿弥陀如来が安置された輿が僧侶に見守られて置かれ、此处も次から次へとお参りする人々であふれている(写真2)。

私たちが、本堂脇の建物で昼食をとって外に出ると、境内は、民族衣装を身にまとった人・人・人で溢れかえっていた。大川さんの甥の丹華さんが私たちの為の腰掛を用意くださっていて、踊りなど鑑賞しやすい位置に並べて下さった。各自が位置を決めて周りを見回すと、男たちはべろの付いた毛皮の帽子をかぶり、女性たちは老いも若きも、花模様などを縫い取った黒い布を頭に載せて赤や青の石の頭飾りで留め、幾重にもネックレスを付けた民族衣装の盛装である。巴旺は「美人谷」と言われる場所柄でどの女性も見とれるほど美しい(写真3)。

周辺の女性に見とれていると間もなく寺の中から四角い箱が次々に運び出され始めた。寺に納められていた108巻の経典で、この箱を頭に頂くと悪霊から身を守ることが出来るのだそうで、それぞれ経典の箱を持つ人が列になって進み、参拝の人たちは自ら進んで頭下げて触れて貰っていた(写真4)。



1



2



3



4

(11日の写真説明は文中)



ひとりひとりこの行事が済むと、いよいよ廟会の踊り・ゴージャン³⁾が始まる。

民族衣装を着、晴れがましい表情で既にスタンバイしていた踊り手たち(写真5)は、列を作って境内に現れると境内いっぱい輪になって嬉しそうに楽しそうに踊り始めた(写真6・7・8)。

踊りと踊りの合間には伸び伸びとした美声で歌う人たちありで、青空から春の日差しが燦々と降り注ぐ寺の境内は、さながら踊りと歌の大演芸場に化した。廟会はこのまゝ夜まで続くのだろうか。私たちは翌日12日は早朝のバスで成都に戻るので丹巴での買い物予定があり廟会の会場を後にした。(終)

写真提供：越後雅子 / 河本義宣 / 神林直樹 / 為我井輝忠 / 早坂優子 文：田井光枝

※掲載写真のほか、参加の皆さんから寄せられた写真を‘わんりい’ホームページフォトギャラリーに掲載しました。

<http://wanli-san.com/pictur/ph-title.htm>

■注

1) **松安寺**：丹巴県チベット仏教のゲルク派(通称、黄教)の寺。1410年に大金川の川岸に建立、その後焼けて1635年に現在の場所に再建されました。ゲルク派開祖のツォンカバ(宋喀巴1357-1419)の高弟でギャロン出身のアワンザバ(阿旺札巴)が建てたと伝えられていて、丹巴では最も格が高い寺ですが、文革の折に殆ど破壊されました。1980年代頃から徐々に復旧され、近年は特に政府の援助が増えて建物の内外部共に復旧が進んで住民の願いが叶いつつあります。

2) **大きなタンカ(仏画)**：タンカのサイズは高さ12m、幅8mあります。タンカの中央に描かれているのはチベット仏教のゲルク派開祖のツォンカバで、農業暦の正月13日と、ツォンカバが降臨視察すると言われる10

月25日に開帳されます。

3) **ゴージャン**：ゴージャンダンスは踊りたい人が参加しますが、踊りのリーダーが決めます。また、それなりの衣装も必要です。踊りの衣装は、ギャロンの女性達がお祭りや結婚式等で使う晴れ着の一種です。伝統的なゴージャンダンスは楽器を使わずコーラスだけで踊ります。しかし、2000年代に入ってアレンジされたゴージャンダンスが流行りだし、その伴奏音楽には普通の西洋楽器が使われます。が、お坊さんが使う伝統的なドラやホルン等で効果音を入れる場合があります。尚、お坊さんたちの踊りの伴奏楽器は、太鼓、ドラ、トランペット、ホルン、ハンドベル、シンバルなどが使用されます。

(注は、全て大川健三氏より頂きました)